

## 行いの美しい人 ～ あくせくしない態度 ～

この度、「越冬隊友の会ニュースレター 第9号」が発行される運びとなった。思えば、創刊号は、2016年1月であった。継続は、本当に大切である。

編集長の大弥佳寿子氏とは、早稲田大学エクステンションセンターでの講座『がんと生きる哲学 - 医師との対話を通して「がん」と生きる方法を考える -』→『がん哲学外来お茶の水メディカル・カフェ in 0CC』→「東久留米カラオケ大会 ～ 人生百貨店 ～」と3連ちゃん症候群であった。大弥佳寿子氏は、「恋するフォーチュンクッキー」、「糸」、「赤鼻のトナカイ」を熱唱された。感激した。「赤鼻のトナカイさんの現代的意義」は、「個性を引き出される」→「役割 & 使命感の自覚」→「喜び・希望」であろう。「東久留米カラオケ大会」は、まさに、「個性と多様性」の学びであった。

『からし種』は、「どんな種よりも 小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも 大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの 木になります」(マタイ13:32)。これは「越冬隊友の会」の原点でもあろう。人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「人生の方からは期待されている存在」であると感じる深い学びの時が与えられている。

樋野興夫

新渡戸稲造記念センター 長

順天堂大学名誉教授/順天堂大学医学部病理・腫瘍学客員教授

その時、その人らしい「ドリーム」が発動してくるであろう。「ビジョン」は人知・思いを超えて進展することを痛感する日々でもある。「自分の置かれた如何なる境遇」にかかわらず、「人生の version up の邂逅」である。

「越冬隊友の会」の心得 3ヶ条

- (1)「世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度」
- (2)「軽やかに、そしてものを楽しむ。」

自らの強みを基盤とする。」

- (3)「行いの美しい人」

新刊のご紹介 2019年12月11日刊行 日本キリスト教団出版局

「教会でも、**がん哲学外来カフェを始めよう**」  
がん哲学外来カフェを始めよう  
樋野興夫編著

がんの方が対話を通して元気を回復していく「がん哲学外来カフェ」。教会が広く門戸を開き、地域に仕える働きとして、今、高い関心が寄せられている。実際にカフェに携わる26名が、与えられた恵みや気づきを記し、いかにして教会でカフェを始め、続けてきたかを具体的に語る。

四六判・並製・144頁・本体1,500円+税



## 市民学会ニュースレター編集人を辞任して

佐久ひとときカフェ 星野昭江

ニュースレター15号の編集をすべて終えて最後の校正作業に差し掛かった時、訃報が届いた。埼玉医大の矢形寛先生が亡くなられた、と。「何ということ……」、涙と涙を噉りながら、急遽、原稿を差し替えて印刷に回した。

がん哲学外来市民学会ニュースレター創刊号の発行は2012年10月20日である。1ページの冒頭には「がん哲学外来市民学会第1回大会報告」と大きな活字の見出しが躍っている。特別講演として柳田邦男氏に「人は物語を生きる～いのちと響き合う言葉～」というテーマで講演して頂いた。大会長は樋野先生、会場は佐久市の勤労者福祉会館ホール、全ての準備を私たち佐久カフェのスタッフが担った。

第5号、柏木哲夫先生の「本流としての『がん哲学外来』」の原稿本文には、「偉大なお節介・暇げな風貌」という言葉が丁寧な文体の中で語られている。

続いて第6号には沼野尚美チャプレンカウンセラーが寄稿され、テーマは「共に支え共に生きる」。郵送されてきたのは先生の自筆の原稿だった。何度も読み返して感動を新たにしました。

第8号は最も思い出に残る。金沢大会を控えた3月に緊急入院された西村元一先生に「あの一、原稿を」とお願いしたらほどなくして送信されてきた。ただただ嬉しく有り難かった。その後、「元ちゃんハウス」に見学に行った時には先生は新設されたハウス内で写真立ての中に居られた。

ニュースレターの編集に携わって足掛け八年。原稿依頼、写真撮影、割付、レイアウト……、8ページ全てのその行間を埋めていく作業は緻密な計算が必要だったが、楽しい時間だった。

「文は人なり」、原稿を寄せて下さった方々の深い想いと文章に紡ぎ出すまでの思惟の時間に思いを馳せるとき、私は感謝の気持ちでいっぱいになる。市民学会ニュースレター編集という仕事に携わることが出来た私は望外の幸せ者だったと思えるこの頃である。